

令和7年10月20日(月)10:00~12:00

1 校長挨拶

今年の夏は熱中症のニュースが毎日のように続き、暑さのため屋外活動が難しかったが、今日は涼しくなり、季節の変化を感じている。夏の間には津波警報が出たり、伊豆高原分校で職員の車が竜巻で横転するなどの災害被害があったりと様々な対応が必要だった。竜巻は急に来たため、予測しづらいものだった。



学校の方では、今週末に小学部の学習発表会があり、11月には中学部と高等部の東翔祭が続く。9月に教育実習の大学生が2名、10月に介護体験の大学生が1名来校した。体験者の中には、将来の仕事として特別支援学校の教員を考えていなかったが、「進路の一つに検討したい」と述べる者もあり、学校の魅力が伝わったことは大変良かった。

9月にはNHKののど自慢があり、職員1名が本選に出場した。職員は、学校で子どもたちが頑張っている姿や、学校の魅力を伝えたいという思いで出場したという。若い先生も積極的に情報発信してくれていると感じた。

先週は函南町議、長泉町議、県議の視察があった。本校の取り組みが広がり、子どもたちが過ごしやすい社会になっていけば良いと思っている。引き続き協力をお願いしたい。

2 本校の取り組みについて

(1) 指定研究について

現在、県内の特別支援学校における研究指定に取り組んでいる。韮山地区に本校と伊豆の国特別支援学校があるため、交流及び共同学習を深める目的で2022年に「韮山地区特別支援教育推進協議会」が設立された。2023年には韮山小・韮山南小、韮山中、伊豆の国特別支援学校、本校の5校での交流が始まった。地域での取り組みが評価され、今年度より県から研究指定を受けている。指定に伴う予算で、交流活動で用いる備品（ボッチャ用具など）を貸し出し、活動の深化に役立てている。

指定研究は今年度から来年度にかけての2年計画であり、「地域と学校が一体となった共生・共育の推進」を目標としている。

(2) 今年度の各学部の交流について

○小学部の交流について

学校間交流はこれから本格的に始まるため、現在までに行われた主な交流活動が紹介された。

1学期にIT企業の協力を得てプログラミング学習（ミニロボ操作）を実施した。企業の担当者からは「試行錯誤ができ、創出性がある」と評価され、児童の自信に繋がった。2学期は外部からハーモニカボランティアに来てもらうこと、民族楽器の体験が計画されている。

韮山小、韮山南小との学校間交流は、10月末から11月にかけて相手校の児童が来校し、学年交流を行う。居住地校交流として、児童が住んでいる地域の小学校へ行き、授業と一緒に参加し、地域内での交流を広げている。

○中学部の交流について

今年度は、同年代の仲間との関わりを通じて、自分らしく表現し関わりを広げられた生徒100%とすることを重点目標に掲げた。伊豆の国特別支援学校との交流を1年生

がスタートさせ、1回目は寄付されたオミビスタでおもてなしをし、生徒が主体的に役割を考え準備に取り組んだ。2年生は菰中と伊豆の国特別支援学校との3校交流を実施し、校内オリエンテーリングやボッチャに取り組み、生徒同士がすぐに距離を縮め、車椅子を押すなど自然な関わりが生まれた。菰中生からも「もっとやりたい」との感想が出た。3年生は長井崎小中一貫校（7年生）との交流を実施し、クイズ形式で本校の授業内容を紹介したり、59ZUBAAN！（的あて）のレクリエーションをしたりして盛り上がった。またIT企業アスタワークス様（三島）が寄贈した59ZUBAAN！を使った体育祭への取り組みを見学いただき、生徒の道具の使い方や、一生懸命取り組む姿に感動したと感想をいただいた。

生涯学習サポーター事業を活用し、ディンプルアート（美術）を行い、作品は東翔祭で展示予定である。茶の授業では、地元の茶の先生を招き、抹茶体験を行い、伝統文化に触れる機会を得た。

成果として、同年代との交流をじっくり行えたこと、教師の働きかけがなくても自然な関わりが生まれたこと、生徒自身が活動内容を主体的に考える機会が増えたことなどが挙げられる。

○高等部の交流について

今年度は特に関わり方を意識し、交流前に、本校生徒がどのように活動し関わるのかを相手校にレクチャーしてから実施した。

伊豆中央高校との交流では、生徒が役割を持ち、挨拶やiPad操作の仕方を説明しながら会を進行した。野球部の横断幕を贈り、試合中にベンチに掲げられていた。

田方農業高校との交流も2回行われ、自己紹介の時間に、生徒それぞれの関わり方（言葉、iPad操作、2択による意思表示など）を説明してから交流を開始した。交流を通じて、田農の生徒が本校生徒の様子を熱心に見守り、会を一緒に進行する様子が見られ、双方向の関わりが多く生まれた。

外部との繋がりとして、読書月間に合わせ読み聞かせを外部の方をお願いした。

作業的な活動として、一部の生徒がリサイクル活動（ラベル剥がし、缶つぶし）を行い、業者へ渡したものをトイレットペーパー等に換えてもらった。これは生徒が社会に貢献する力を発揮し、認められる機会となり、達成感に繋がっている。

産業現場等における実習も2回行われ、生徒は実習先で、困った時に伝える、分からないことを聞く、自分なりに挨拶や気持ちを伝えるなどの成果を発揮している。

○今後やりたいこと

- ・ 小学部：大型で体験型の施設、車椅子で見学できるお菓子工場などの見学先求めている。
- ・ 中学部：外食体験、地域の特産品に関わる場所への訪問を求めている。
- ・ 高等部：近隣の農家さんと繋がりを持ちたい（コロナ禍で途絶えた繋がりを再開したい）。
- ・ 全 般：外出時に公共交通機関の利用の難しさ（例：コインを入れる場所が高い、歩道が斜めなど）があり、学校側からインフラ改善に関する情報発信も必要ではないかと考えている。

（４）PTAの地域とのつながり

PTA主催でプール開放イベントを企画し、児童生徒とその家族約40名が参加し、伊豆医療福祉センターの理学療法士もボランティア参加した。

伊豆の国特別支援学校 PTA との交流会を開催し、お互いの学校の特性を知り、今後も協力していくことを確認した。

10月1日には、韮山ライオンズクラブ、PTA、教職員合同で奉仕作業を実施し、花壇や校内がきれいになった。

3. 協議「地域資源の活用」について

委員：特別支援学校は一般の生徒からすると特別な学校という壁があるように感じるが、学校側から積極的に発信したり、外部から来てもらったりしており、とても良い交流ができています。

委員：ライオンズクラブとして何十年も外部環境の整備でお世話になっており、学校の存在は把握している。生徒たちが地域で何ができるかという問いに対し、「逆にどんなことができるのか」「手伝ってもらおう」「体験してもらおう」大人（地域社会）の生活を緊張せず感じてくれたら、交流がやりやすくなる。ライオンズクラブのメンバーに持ち帰り、協力を求める作業は問題なく行える。



委員：多くの交流活動において、地元の人に関わっているケースが少なく、外部（市外など）からのボランティア参加が多いことに残念な気持ちになる。地元には多様な職業や経験を持つ人が多くいるため、地域住民がもっと参加できるよう工夫をしたい。学校側が地域資源をどう見つけるかが課題である。学校がもっと地域に情報を発信し、地域の人とすれ違う機会が増えるだけでも違うのではないかと。普通に接していただくという姿勢が第一であり、その中で苦手なことや得意なことを見つけていってもらうのが良い。正月飾りを作る時期なので、地域の職人を呼んで、作る場所を見学したり、飾り付けを一緒にやったりするというのはどうか。

委員：同世代の仲間同士が関わることで、障害の有無にかかわらず自然に学べるため、とても良い成果が出ている。学校の発信力は素晴らしい。「地域に開かれた学校」「防犯」という相反する側面のバランスが難しい。日々のルーティンが中心で、外部とのイベント企画は大変なエネルギーが必要である。まずは小さな取り組みから始めて、実績と繋がりを作り、発展させていくのが良い。外出が難しい場合は、来てもらおう（例：移動販売）という形式も有効であり、社会体験として重要である。学生時代の経験は、将来福祉サービスを利用する際にも心に残るものとなるだろう。

委員：各学部の交流の様子に変化しつつも継続していて良かった。同窓会は任意加入で、ここ数年人数が続かず活動が難しい状況にある。以前 PTA で行っていたバザーは地域の方や卒業生の親が集まるきっかけになっていた。学校行事（文化祭など）を地域に開き、卒業生も呼んでくれるような形にすれば、卒業生が母校に帰るきっかけを作れる。同年代との交流だけでなく、卒業生との関わりを持つ機会も重要ではないか。重度のお子さんが多いため、卒業生との関わりを設ける場合、保護者の負担が大きくなる問題もある。実際に学校に外部の方に来ていただき、生徒の活動やできることを見ていただける機会が増えてきたことを嬉しく思っている。活動の環境は、昔の活動に近い形に徐々に戻ってきていると感じる。交流や体験の回数が少ないと感じるため、回数を増やすべき。地域の方で登録制を設け、授業のお手伝いを気軽にしてもらうのが良いのではないかと。個人商店の人に簡単な移動販売を学校に

来てもらい、買い物練習をさせてみるのはどうか。食を通じた交流（給食を一緒に食べる、地域の料理を教えながら食べるなど）も可能ではないか。高校生や中学生との交流の回数を増やし、個人に焦点を当てた交流を深めるべき。卒業生が働いている就労施設や生活介護施設の職員と一緒に、卒業生を学校に招き、今の生活を話してもらう機会を設けても良いのではないか。コロナ禍で「できなくなっている」と思い込んでいる活動を、改めて復活させることも大事である。

委員：休日、周囲に迷惑をかけることを懸念し、外出先が限られてしまう問題がある。家族として、本人（児童・生徒）が楽しめる地域住民の交流イベント（夏空音楽祭、よさこい祭り）に積極的に参加している。学校の近くで、地域との交流ができるようなイベント参加のきっかけがあれば良いと願う。

学校：地域の農家やJAと繋がるにはどうしたらいいか、突撃アポではなくきっかけとなる情報がほしい。業種に関わらず、地域の人材や企業の情報があれば、学校の学習と結びつけられないか考えられるので、情報提供がありがたい。

学校：学校で音楽や体育などの活動をまとめた発表や試合をする際、地域の方に時間を伝えて顔を出してもらい、一緒にやってもらう機会を設けてはどうか。高等部では、地域の方の得意な技や趣味のリストがあれば、それを余暇の学習の講師として招くなど、繋がりを持つことができるのではないか。

学校：生徒が何か「物」を提供することだけではなく、一緒に時間を過ごすことで相手に幸せな気持ちを提供するという「非物的な価値」をもっていることも強みである。アート作品は生徒の芸術性が高いため、地域で飾りたいといった要望があれば、受注生産のような形で作品を提供することも可能である。卒業生との関わりについては、卒業生に福祉サービスや就労施設で生活の様子を話してもらう場も検討の余地がある。外出が難しい場合は、体育会館でボッチャをやっているのを見に来てもらうなど、来てもらう形での交流ができる。

4. その他

次回の開催は令和8年2月9日（月）午前10時から開催予定である。学校経営計画についての評価や御意見をいただく予定であり、事前に評価を記入して返送いただくために、書類を1月中に送付する。10月31日にはスクールコンサート（フランさん）が予定されており、これも地域との繋がりとして進めていきたい。